

くじら日記

太地町立博物館から



生き物を飼育するには、生育状態や健康状態を調べ、治療や飼育施設の移動のために、保定（捕まえて押さえておくこと）することも少なくありません。

当館で飼育するクジラも例外ではなく、その作業を「取り上げ」と呼んでいます。クジラを取り上げる場合、彼らが「水中で生活をする巨体の持ち主」であることを踏まえる必要があります。クジラを水中で捕らえるダイバー役の飼育員は、ウェットスーツに着替えマスクとフィン（足ひれ）を身に着けるのですが、プール内を縦横無尽に泳ぎ回る彼らが相手では、捕まえるどころか触れることさえ至難の業です。

そこで、陸上を担当する飼育員は、プールの形状に合わせて漁網で作った「取り網」を操作し、クジラの遊泳範囲

至難の業「取り上げ」



コピレゴンドウを取り上げ、採血する飼育員—太地町

館で中型のバンドウイルカやハナゴンドウでさえ、その体重は約300キロで、力士も遠く及ばない巨体を保定するのは簡単ではありません。

複数のダイバーでクジラの胸びれ、背びれをそれぞれつかみ、クジラの力をうまくいやすことで、ようやく彼らと渡り合えるのです。最後に、クジラを目と胸びれの位置に穴が空いた専用担架に収容すると、ほとんどのクジラが観念し、検査や治療をすることが

できるのです。実際には、クジラ1頭に対し、ダイバー役が3人、陸上で取り網や担架を操作する役が5人くらいですが、作業の規模によって変わります。

今回取り上げたのは、数日前から食欲にムラがあるコピレゴンドウ2頭。昨年9月に自然界から搬入した、飼育して1年の新人です。搬入当初

の取り上げでは、近寄ろうとするダイバーから逃げようとしたり、頭を振って追い払おうとしたりしたため、6人がかりで捕まえるなど大苦戦したのを覚えています。以降、取り上げの回数を重ねたことで、今回はクジラも慣れ、嫌がるそぶりもほとんどなく担架に収容できました。検温と採血、胃液の採取を行い、胃の洗浄も兼ねてお湯を飲ませて終わりました。

取り上げは、特に健康管理に欠かせませんが、飼育員とクジラ双方が場合によってはケガをするかもしれない緊張感ある作業でもあります。この時はやはり、クジラが野生動物であることを忘れずに、安全第一に接することが肝心です。

（太地町立くじらの博物館副館長 稲森大樹）

中型でも300キロ 巨体いなす

を制限します。さらに、ダイバーが協力して遊泳方向を誘導したり、動きを先読みした

りすることで、彼らを捕らえるチャンスが生まれます。ただ触れることができて、当